

鄭玄の經學と西高穴一号墓

渡邊義浩

はじめに

河南省安陽市の西北約一五kmの安陽県安豊郷西高穴村で発掘された西高穴二号墓は、曹操高陵ではないか、とされている。⁽¹⁾ 発掘当初は、西高穴二号墓を曹操高陵に比定する河南省文物考古研究所の見解に対して疑義も提出されていたが、発掘調査が進展すると共に、曹操高陵である可能性は高まってきた。⁽³⁾ 日本から発掘に参加している佐々木正治は、注目すべき三つの新知見を報告している。⁽⁴⁾ 第一に、西高穴二号墓の北側に位置する一号墓は、墓坑以外何も残っていない。すなわち、造営途中で放棄されていること。第二に、陵園は平面長方形で、南北幅六十八m、南壁残長百十m、北壁残長百mという規模であること。また、陵園全体は東向きで、曹操宗族墓と同じであり、一号墓・二号墓ともに、墓室から東へ墓道が延び、その延長上の土壁部分は途切れていて門址がある。そして、墓葬西側に陪

葬墓が少なくとも一基はあること。第三は、二号墓において二つの埋葬時期が確認できることである。すなわち、曹操薨去当時の地面に墓坑と墓道と磬形柱穴が掘られ、墓坑内には磚で墓室が構築されたのち、版築により墓坑・墓道が埋められ、その上に版築により基壇が築かれる。これが第一次埋葬である。その後、基壇面に階段状の側壁をもつ幅広の墓道と長方形柱穴が、墓門位置まで掘られ、最終的に版築により墓道が埋められているというのである。佐々木は、二回目の墓道が、后妃である卞氏を埋葬した際に造られたものであるとする。首肯し得る見解と言えよう。

こうした考古学的な西高穴二号墓の調査を踏まえたうえで生ずる疑問は、二号墓と並列に造られた一号墓が、途中で放棄されているのはなぜか、という問題である。この問題は、合葬とはどのように行うものであるのか、という問題へと繋がっていく。本稿は、西高穴一号墓が、誰のために造られ、なぜ放棄されたのか、という問題を鄭玄の經學との関わりから論ずることにより、西高穴一号墓が造

成途中で放棄された理由を明らかにすると共に、二号墓が曹操高陵である可能性について言及するものである。

一、合葬の諸類型

西高穴一号墓が放棄された理由を考えるため、漢代における皇后陵・王后墓のあり方を皇帝陵・王墓との合葬という視座より検討することから始めよう。

長安の近郊に広がる前漢時代の皇后陵は、皇帝陵を守る陵邑と共に、皇帝陵の傍らに造営したことが解明されており、実際に複数の皇后陵が現存している。⁽⁵⁾ 皇帝と皇后がそれぞれ陵を持ちながらも、それを「合葬」と呼ぶことについて、『史記集解』に引用される『關中記』は、次のように述べている。

（崔）駰案するに、「關中記に云ふ、『高祖の陵は西に在り、呂后の陵は東に在る。漢の帝・后 塋を同にすれば則ち合葬と爲すも、陵を合はせざるなり。諸陵も皆 此の如し』と」。⁽⁶⁾

「陵を合は」せないにも拘らず、合葬と称するのは、「塋」を共にするためである。塋とは、「冢域」のことで、『漢書』卷十一 哀帝紀引顔師古注）、前漢の皇帝と皇后は、「冢域」（兆域）を共にする空間に異墳異穴の「合葬」をされたのである。

続いて、前漢時代の王后墓を検討しよう。一九六八年、河北省滿城県陵山で発見された滿城漢墓一号墓は、三国蜀漢の建国者劉備が

自らの祖先と唱えた中山靖王劉勝の墓である。武帝の元鼎四（前一三）年に没した劉勝は、金鏤玉衣に身を包まれて発見された。二号墓が、妻の竇綰の墓であり、二基の横穴式の崖墓が約一〇〇mの間隔を置いて並列する異穴の合葬墓となっている。⁽⁷⁾ また、一九七四～七五年、河北省北京豊台区大葆台で発見された大葆台漢墓一号墓は、黄腸題湊で有名であるが、昭帝の元鳳元（前八〇）年に没した燕王劉旦の墓である。二号墓が、妻の華容夫人の墓であり、二基の横穴式の木室墓が二六、五mの間隔を置いて東西に並列する異穴の合葬墓である。⁽⁸⁾ 皇后陵のように明確に墳丘を異にすることはないが、前漢時代の王后は、異穴の「合葬」をされていたと言えよう。

前漢時代の合葬が異穴であるのは、墓の構造に起因するところが大きい。一九七二年、湖南省長沙市で発見された馬王堆漢墓は、三号墓から出土した帛書で有名であるが、王墓ではなく、呂后二（前一八六）年に没した長沙国丞相の利蒼とその妻子の墓である。一号墓より出土した妻の辛追の遺体は、発見時になお生けるが如きであった。それは、七、八メートルほど垂直に掘り下げられた堅穴に棺を置き、その上に5トンにも及ぶ木炭を積み上げて外気との接触を遮断していたためである。⁽⁹⁾ こうした堅穴墓は、構造上、遺体を追葬することは難しく、同時に死去しない限り同穴の合葬を行うことは不可能であった。大葆台漢墓に見られる、約九〇cm角の柏^{このくわいしわ}の木口を内に向けて一万本以上も積み重ねて造る黄腸題湊も、墓室の上を白膏泥と木炭により密閉している。⁽¹⁰⁾ 遺体を追葬することは難しい。

これに対して、前漢後期より、黃腸題湊の代わりに、羅振玉が「黃腸石」と名付けた方形の石が用いられるようになり、石や磚により横穴の墓室が造られるようになった。これにより、一度埋葬した後でも、遺体を追葬することが可能となり、後漢時代には同穴合葬が普及していく。⁽¹²⁾

『後漢書』本紀十 皇后紀によれば、後漢の皇后は皇帝と合葬されている。⁽¹³⁾ 洛陽の郊外には、後漢の皇帝陵が現存する。ただし、清の乾隆年間に龔崧林が比定した十一陵には根拠がない。現在、北（邙山）に五陵、南（万安山麓）に六陵の皇帝陵が調査されているが、その際、皇后陵の存在は棚上げにされているという。⁽¹⁵⁾

かつて太田侑子は、後漢は皇帝の陵墓内に皇后を合葬したと推定され、また、諸侯王の陵墓においても皇帝陵と同様の展開がみられる、とした。⁽¹⁶⁾ その論拠は、民間における同穴合葬墓の広がりには置かれたが、調査の進展した後漢の諸侯王墓を見る限り、その推定は正確ではない。

近年における後漢の諸侯王墓の調査をまとめた劉尊志によれば、⁽¹⁷⁾ 現在発掘されている後漢の諸侯王の合葬は、異墳異穴の下邳王とその王后墓（以下、王后墓を略）、同墳異穴の彭城王墓、陳傾王劉崇墓、同穴異室の中山穆王劉暢墓・琅邪王墓・廣陵思王劉荆墓、同穴同室の中山簡王劉焉墓の四種七基がある。その合葬方法は、異穴（三基）と同穴（四基）とが拮抗しており、そこには時期的・地域的な偏差も認められない。後漢の王墓の合葬様式は、多様であったと言える。

う。

曹操高陵に比定されている西高穴二号墓からは、陶鼎が十二件発見されており、『後漢書』禮儀志に、「瓦鼎十二」と記される天子の明器に等しい。また、石壁の直径・石圭の長さともに二八cmであり、『周禮』考工記 玉人に、「玉人の事。鎮圭 尺有二寸、天子之を守る」とある天子の禮制に同じである（注（一）所掲著書を参照）。曹操は武王として埋葬されたとはいえ、実権は天子を凌いでおり、その陵墓は王墓よりも皇帝陵と比べるべきなのかも知れない。しかし、後漢の皇帝陵の調査が公表されていない現時点では、比較は不可能である。そこで、文献資料により、後漢の皇帝と皇后の合葬について探っていこう。

二、經學における合葬の解釈

後漢の年間定例祭祀と葬儀規定を記した『後漢書』禮儀志は、合葬について次のように述べている。

合葬するに、羨道 開通し、皇帝は便房に謁す。太常は導きて羨道に至り、杖を去り、中常侍は受く。柩の前に至り、謁し、伏し哭き止むこと儀の如くす。辭するに、太常は道出し、中常侍は杖を授け、車輿に升りて宮に歸る。已に下り、反りて虞するに主を立つること禮の如くす。諸々の郊廟の祭服は皆 便房に下す。五時の朝服 各々一襲は陵寢に在り、其餘及び宴服

は皆封ずるに篋笥を以てし、宮殿の後ろの閣室に藏す。⁽¹⁸⁾

禮儀志によれば、後漢の皇帝は、先帝に皇太后を合葬するときに、羨道を開き、先帝の柩の前に至って、謁して哭泣をする。その際、皇太后の棺をそのまま先帝の石室に埋葬すれば同穴合葬である。しかし、皇太后を異穴に合葬することを先帝に報告し、皇太后の崩御を傷んでいるのであれば、異穴合葬となる。禮儀志の記述だけでは、これが同穴・異穴のいずれの合葬であるかを定めることができない。⁽¹⁹⁾後漢時代における皇帝と皇后の同穴合葬を主張する注(一六)所掲太田論文が論拠とするのは、後漢末、董卓が靈帝の文陵を略奪したことを伝える次の資料である。

是の時、洛中の貴戚、室第相望み、金帛財産、家家に殷んに積む。(董卓)卓縦に兵士を放ちて、其の廬舎を突き、婦女を淫略し、資物を剽虜し、之を搜牢と謂ふ。人の情崩れ恐れ、朝夕を保せず。何后を葬り、文陵を開くに及び、卓悉く藏中の珍物を取る。又公主を姦亂し、宮人を妻略し、虐刑濫罰もて、睚眦だに必ず死す。⁽²⁰⁾羣僚内外、能く自ら固すること莫し。

この資料も、皇太后を合葬するときに、先帝の陵(靈帝の文陵)を開いたことは記されるが、禮儀志と同様、先帝の墓室に皇后を埋葬したのか否かは記されない。すなわち、文陵に何皇后を同穴合葬した際に、文陵を略奪したのか、異穴合葬した際に、報告のために開けた文陵を略奪したのかを定めることはできないのである。

『後漢書』本紀卷十下 何皇后紀によれば、何皇后は文昭陵に合葬

されており、靈帝の埋葬されている文陵とは名称が異なる。しかも、獻帝の生母である王皇后が、のちに文昭陵に改葬されており、靈帝と何皇后が同穴合葬されていれば、何皇后を退かせなければならぬいが、何皇后を他に葬り直した記録はない。⁽²¹⁾しかも、王皇后の文昭陵に関しては、靈帝の文陵の園北に造営したことが、『太平御覽』に引かれる『續漢書』の佚文に明記されている。

續漢書に曰く、「孝靈靈懷王皇后は、孝獻帝の母、王章の女なり。

……陵は文昭陵と曰ひ、墳を起こし陵園の北に立つ」と。⁽²²⁾

王皇后の文昭陵は、靈帝の文陵の陵園の北方に立てられており、靈帝と王皇后は異穴合葬されたことが分かる。途中で放棄された西高穴一号墓も二号墓の北方に造成されていた。皇后を北にすることが通例であったのであろうか。

また、桓帝の梁皇后は、桓帝よりも先に崩御し、懿陵に葬られていたが、桓帝は、梁冀を誅殺すると、懿陵を廃止して、貴人の塚とした(『後漢書』本紀卷十下 梁皇后紀)。梁皇后が埋葬されていた懿陵内の墳墓が、桓帝自らも葬られる予定の同穴墓であれば、大規模な修復工事が必要とする。後述するように、漢では漢律の墳丘條により身分の差に応じて墳丘の高さが異なっていたためである。しかし、ここには、修復工事の記事はなく、桓帝がすでに宣陵に埋葬されていた靈帝期にも、梁皇后は懿陵の中に葬られて続けていると認識されている(『後漢書』列傳四十六 陳球傳)。したがって、桓帝は、懿陵の梁皇后を埋葬していた穴に入る予定は当初からなく、

梁皇后の墳墓は、皇帝とは異なる大きさの墳丘を持つもので、記録に残らない程度の小規模な修復により、貴人の塚に改変できたと考えられる。⁽²³⁾

後漢末の桓帝・靈帝の事例より考えると、後漢の皇帝陵と皇后陵とは、異穴合葬であったと言えよう。それは、次の資料によって傍証される。

〔樊宏〕二十七年、卒す。遺勅して薄葬し、一として用ふる所無からしむ。以爲へらく、「棺柩一たび臧れば、宜しく復た見るべからず。如し腐敗すること有らば、孝子の心を傷ましめん」と。夫人と墳を同じくして臧を異にせしむ。帝其の令を善とし、書を以て百官に示し、因りて曰く、「今壽張侯の意に順はざれば、以て其の徳を彰すこと無し。且に吾が萬歳の後、以て式と爲さんと欲す」と。錢千萬、布萬匹を賻り、謚して恭侯と爲し、贈るに印綬を以てし、車駕親ら送葬す。⁽²⁴⁾

光武帝の舅である樊宏は、卒する際に「夫人と墳を同じくして臧を異に」する合葬を遺言した。あるいは、王莽が暴いた傳皇太后の腐臭を知っていたのかもしれない。これを聞いた光武帝は、「同墳異臧（同墳異穴）」を「式」としたという。

光武帝の原陵を造成した明帝は、孝のために儒教の古礼とは異なり、陵の上で祭祀を行う上陵の礼を創設している。⁽²⁵⁾ 光武帝の命に従い、「同墳異穴」の合葬とした可能性は高い。となれば、後漢の皇帝陵の格式を持つ曹操高陵は、終令により墳丘を伴わないとしても、

当初は西高穴二号墓・一号墓のように、異穴の合葬であったのではないか。それでは、西高穴二号墓が曹操高陵であったとすれば、一号墓が放棄されたのはなぜであろうか。その理由は、後漢における經學の展開から明らかにすることができる。

三、經學における合葬の解釈

後漢「儒教國家」の經義を定め、「古典中国」を確立した章帝期の白虎觀會議⁽²⁷⁾の内容をまとめた班固の『白虎通』崩薨篇は、合葬について次のように述べている。

合葬なる者は何ぞ。夫婦の道を固むる所以なり。故に詩に曰く、「穀^いきては則ち室を異にするも、死しては則ち穴を同^{とも}にせん」と。又禮の檀弓に曰く、「合葬は、古に非ざるなり。周公より已來、未だ之を改めること有らざるなり」と。⁽²⁸⁾

『白虎通』は、合葬を「夫婦の道」を固めるものと位置づけ、『詩經』王風・大車と『禮記』檀弓上の文章を引用する。その際に、合葬の具体的な方法に触れることはない。『白虎通』が、『詩經』と『禮記』を引用したのは、合葬に関する哀帝の詔を踏まえているためである。

〔建平二年〕六月庚申、帝太后の丁氏崩ず。上曰く、「朕聞くなく、夫婦は一體なりと。詩に云ふ、『穀^いきては則ち室を異にするも、死しては則ち穴を同にせん』と。昔季武子寢を

成す。杜氏の殯、西階の下に在り。合葬を請ひて之を許さると。

附葬の禮は、周より興る。郁郁乎として文なるかな、吾周に従はんと。孝子は亡に事ふること存すに事ふるが如くす。帝太后は宜しく陵を恭皇の園に起すべし」と。遂に定陶に葬る。陳

留・濟陰の近き郡國より五萬人を發して穿ちて土を復さしむ。⁽²⁹⁾

哀帝は、定陶恭王劉康と帝太后丁氏の子として生まれ、傍系より成帝を嗣いだ。帝太后丁氏が崩御すると、哀帝は父の劉康と丁后を合葬するため詔を發したが、そこには『詩經』王風大車と『禮記』檀弓上が引用されている。『白虎通』とは引用箇所が異なるかにも見える『禮記』檀弓上であるが、「合葬を請ひて之を許さる」の続きの部分に、「武子曰く」として「合葬は、古に非ざるなり。周公より已來、未だ之を改めること有らざるなり」と語られる。『白虎通』と同じ箇所の引用と考えてよい。

合葬の際に、墳丘が「穿」たれて「土を復」しているように、哀帝の父母は、前漢の皇帝・皇后陵のように墳丘を異にせず、同墳異穴墓に合葬されている。前漢の王墓に相応しい格式である。『白虎通』の合葬が先例とする哀帝の父母の合葬が同墳異穴であることは、哀帝の詔を典拠とする『白虎通』の合葬が、同墳異穴を前提に定義されたと考え得る証拠となろう。

また、哀帝の詔も、それに基づく『白虎通』も、『詩經』王風大車を引用しているが、これは劉向の『列女傳』貞順 息君夫人傳に基づく。楚王が自殺した息君夫妻を哀れんで行った合葬は、春秋時

代であるため異穴合葬となる。『列女傳』を編纂した劉向の生きた前漢もまた、異穴合葬が原則であった。したがって、これも異穴であることを前提とした引用となっている。

このように、『白虎通』の典拠とされている經典の合葬は、みな異穴合葬であり、後漢の經義に則れば、合葬は穴を異にすべきであった。西高穴二号墓が曹操高陵であるならば、卞后の合葬のために一号墓を造成することは、經義に合致することとなる。一号墓が放棄される理由があるとすれば、それは下太皇太后が崩御した明帝期に、鄭玄の經學が採用されたことに求められる。

後漢末を生きた鄭玄の經學は、「三禮體系」により諸經を体系化するもので、緯書に基づく宗教的な經典解釈を特徴とする。⁽³⁰⁾『白虎通』の合葬の典拠であった『詩經』王風大車の「穀きては則ち室を異にするも、死しては則ち穴を同にせん」について、鄭玄は毛傳を踏まえて次のように注をつけている。

「毛傳」生きては室に在るも、則ち内外を異にし、死すれば則ち神合し、同一と爲るなり。「鄭箋」穴とは、塚壙の中を謂ふなり。此の章、古の大夫 聽訟の政を言ふなり。⁽³²⁾

毛傳では、合するとされているものは「神」であり、合葬の具体像に触れることはない。これに対して、鄭箋は、穴とは、塚壙(墓)の中のこととする。ただし、この表現だけでは、鄭玄の合葬が、同墳同穴か同墳異穴かを明確に判断することはできない。それを明らかにするものは、『禮記』の鄭玄注である。鄭玄の經典解釈は、「三

禮體系」を持つため、經禮である『周禮』を頂点とする三禮の解釈に、他の經典解釈は従属する。⁽³³⁾『禮記』檀弓下の注で鄭玄は、次のように合葬を二種に分け、その優劣を定めている。

孔子曰く、「衛人の耐するや之を離す。〔耐とは、合葬を謂ふなり。之を離して、以て其の梓中に間つ有り。〕魯人の耐するや之を合す。善きかな。〔善きかなとは、魯人を善するなり。耐葬は當に合はすべきなり。〕」と。⁽³⁴⁾

鄭玄は、耐葬（合葬）は、衛のような「同墳異穴」ではなく、魯のような「同墳同穴」をよしとすべし、と孔子が述べたと主張する。すなわち、鄭玄の經學では、合葬は同墳同穴とすべきなのである。

以上のように、後漢「儒教國家」における「合葬」は、「同墳異穴」であったが、これを鄭玄は「同墳同穴」に改めている。曹魏の明帝は、こうした「合葬」規定を持つ鄭玄の經學を曹魏の正統な學問と定めていく。

四、明帝による鄭玄説の採用

曹操の孫にあたる明帝曹叡が、鄭玄説を採用した背景には、司馬懿の台頭と高堂隆の危機感がある。⁽³⁵⁾明帝は、青龍五（二三七）年一月、黃龍の出現が報告されると、曹魏を地統、建丑の月を正月とする正朔の改制を行い（『三國志』卷三 明帝紀）、景初と改元して三月より楊偉の景初曆を施行する（『晉書』卷十七 律曆志中）。六月

には七廟制に基づき三祖を定め、洛陽の南の委粟山に園丘を造営し、十二月の冬至に始めて園丘で吳天上帝を祭祀するのである（『三國志』卷三 明帝紀）。したがって、感生帝説・六天説を特徴とする鄭玄説に基づく祭天儀礼が完成したのは、景初元（二三七）年のことであった。

すでに述べたように、西高穴二号墓の墓道は、二度造られている。曹操が薨去したのは、建安二十五（二二〇）年のことであり、⁽³⁷⁾高陵では後漢の葬礼を継承して上陵の礼を行うため、陵屋が建てられていた。曹操の子である文帝曹丕が、關羽に降伏した于禁を辱めたのは、曹操高陵の陵屋に描かせた絵による。

遣はして吳に使ひせしめんと欲し、先づ北のかた鄴に詣り高陵に謁せしむ。（文）帝豫め陵屋に、關羽戰ひ克ち、龐惠は憤怒し、（于）禁は降服せしの狀を畫かしむ。⁽³⁸⁾

西高穴一号墓・二号墓の北側に発見された建築遺跡は、陵屋の跡と考えることができる。文帝曹丕はやがて、曹操の薄葬令を理由に、高陵の上殿を毀廢する。

古は墓祭の禮無し。漢 秦を承け、皆 園寢有り。正月上丁、南郊に祠る。禮畢はるや、北郊・明堂・高廟・世祖廟に次づ、之を五供と謂ふ。魏武 高陵に葬むらる。有司 漢に依り陵上に祭殿を立つ。文帝の黃初三年に至り、乃ち詔して曰く、「先帝躬ら節儉を履み、省約を遺詔す。子は父に述ふを以て孝と爲し、臣は事を繫ぐを以て忠と爲す。古は墓祭せず、皆 廟に設く。

高陵の上殿は皆毀壞し、車馬は廐に還し、衣服は府に藏して、以て先帝が儉徳の志に従はん」と。文帝自ら終制を作り、又曰く、「壽陵に寢殿を立て、園邑を造ること無かれ」と。自後、園邑・寢殿遂に絶ゆ⁽³⁹⁾。

西高穴二号墓の二つの柱洞のうち、新しい長方形の柱洞には、長期間柱が建っていた形跡が認められない。後漢以来の上陵の礼が廃棄された曹操高陵の遺跡として相応しい。

上陵の礼に用いてきた器物は、鄴城に移されたようである。兄の陸機が著そうとした『吳書』のために、実地調査を報告していた陸雲の書簡には、曹操の器物が次のように記されている。

一日 案行し、曹公の器物を并せ視る。牀・薦席は具はり、寒夏の被は七枚なり。介幘は吳幘の如く、平天冠・遠遊冠 具に在り。……器物は皆素なり。今鄴宮に送らる。大尺の間、數々前に已に其の總帳、及び墓田を望む處を白す。……⁽⁴⁰⁾

このほか、「與平原書 其二」には、曹操の石墨、「其三十」には、曹操の器物の報告がある。西高穴二号墓から出土した器物に書かれた文字は、大別して三種の書体が見られ、複数の人間が文字を書いていることが分かる。陸雲の見た器物は、二度目の埋葬時に納められた可能性を持つのである。

二度目の埋葬の契機となった卞太皇太后の崩御は、太和四（二三〇）年のことであった。

（太和四年）六月戊子、太皇太后崩ず。……秋七月、武宣卞

后を高陵に耐葬す。大司馬の曹眞・大將軍の司馬宣王に詔して蜀を伐たしむ。⁽⁴²⁾

卞太皇太后を「高陵に耐葬（合葬）」した秋七月、曹眞と司馬懿が蜀漢を征討しているように、当時の曹魏の国力は充実しており、負担を軽減するため一号墓の工事を途中で止める必要はない。止める理由があるとすれば、後漢の禮制に基づき異穴としていた高陵を鄭玄の經學に従って同穴に改めたことに求められるが、前述したように、鄭玄説に基づく祭天儀礼が完成したのは、景初元（二三七）年のことである。それ以前において、明帝が鄭玄説に従う可能性はあったのであろうか。

『周禮』の鄭玄注には、漢律の墳丘條が次のように引用されている。凡そ功有る者は前に居り「王墓の前に居り、昭穆の中央に處す」、爵等を以て丘封の度と其の樹數とを爲す。「尊卑を別つなり。

王公を丘と曰ひ、諸臣を封と曰ふ。漢律に曰く、「列侯の墳は高さ四丈。關内侯より以下、庶人に至るまで各々差有り」と。⁽⁴³⁾

鄭玄が、『周禮』の解釈に漢律を引用するのは、鄭玄が漢律に注をつけているためである。『晉書』刑法志は、その間の経緯について、次のように説明する。

漢 秦の制を承け、蕭何律を定め、參夷・連坐の罪を除き、部主・見知の條を増し、事律の興・廐・戸の三篇を益し、合はせて九篇と爲す。叔孫通 律の及ざる所の傍章十八篇を益し、張湯の越宮律二十七篇、趙禹の朝律六篇と、合はせて六十篇なり。

……此の比たとひの若く、錯糅すること常無し。後人意を生おこし、各々章句を爲る。叔孫宣・郭令卿・馬融・鄭玄の諸儒の章句十有餘家あり、家ごとに數十萬言なり。⁽⁴⁴⁾

鄭玄は自らの經學に基づき、漢律を解釈していた。後漢「儒敎國家」においては、律の法源には儒敎の禮學が置かれていたのである。したがって、鄭玄以外の儒者も、それぞれ漢律に注をつけたので、その解釈は複雑多岐にわたっていた。曹魏は、建国の当初、漢律を繼承したが、その解釈の多様性に苦しみ、明帝の時に曹魏独自の律として新律十八篇を制定する。⁽⁴⁵⁾それ以前に明帝は、漢律の解釈を統一するため、鄭玄の解釈のみを用いることを詔で命じている。

凡そ罪を斷するに當に由りて用ゐるべき所の者は、合はせて二萬六千二百七十二條、七百七十三萬二千二百餘言なり。言數益々繁く、覽者益々難し。天子是に於て詔を下し、但だ鄭氏の章句のみを用ゐ、餘家を雜用するを得ずと。⁽⁴⁶⁾

漢律は、墳丘條を含むように、埋葬方法も規定する。鄭玄の解釈する律では、合葬の方法は、鄭玄の經典解釈に基づく同穴合葬となる。したがって、この詔が下太皇太后が崩御する景初三（二三七）年以前に出されていれば、下太皇太后は同穴合葬されることになる。むしろ、新律十八篇が制定された後でも、新律十八篇は、鄭玄の解釈する漢律をもとに制作したものであるため、合葬の解釈は繼承されたと考えてよい。

しかし、鄭玄の解釈に従うことを定めた詔だけではなく、新律十

八篇もその成立年代を『三國志』・『晉書』が記すことはない。ただ、『晉書』刑法志の伝える新律十八篇の成立過程より、その成立年代を推測することはできる。先に掲げた鄭玄の解釈だけを用いる詔を掲げた後、『晉書』刑法志は、太傅の鍾繇（二三〇年）が肉刑を復活することを求め、司徒の王朗（一二二八年）に反対されて沙汰止みにした案件を記す。そのうち、新律十八篇が編纂されたことを次のように述べるのである。

其の後、天子〔明帝〕又詔を下し刑制を改定せんとし、司空の陳羣、散騎常侍の劉邵、給事黃門侍郎の韓遜、議郎の庾嶷、中郎の黃休・荀詵らに命じ、舊科を刪約し、漢律を傍采し、定めて魏の法と爲す。新律十八篇・州郡令四十五篇・尚書官令・軍中令、合はせて百八十餘篇を制す。⁽⁴⁷⁾

鍾繇と王朗の肉刑の議論は、王朗の死去年より、一二二八年前と定まる。それ以前に記されている鄭玄の解釈のみに従う詔は、それより前のことである。正確な年代は不明であるが、少なくとも太和四（二三〇）年の下后の崩御までには、鄭玄の律の解釈が曹魏で唯一のものと認められている。したがって、『禮記』の解釈に基づく、鄭玄の合葬の理解は、明帝による下后の合葬に影響を与えたと考えられるのである。

おわりに

以上、論証したように、西高穴二号墓の北側に造成され、使うことなく放棄された一号墓は、後漢の禮制に基づいて下后のために造られた異穴合葬のための墓が、曹魏の明帝による鄭玄説の採用によって放棄されたものと考えられる。

西高穴二号墓を曹操高陵と確定するためには、さらなる周辺調査を待たねばならないが、一号墓の放棄の理由が論証されたことにより、西高穴二号墓が曹操高陵である可能性は大きく進展したと言えるよう。

注

- (1) 西高穴二号墓が発見された経緯、発掘簡報などに記された墓の大きさや出土文物の詳細については、河南省文物考古研究所（編著）『曹操墓真相』（科学出版社、二〇一〇年）や発掘簡報などを翻訳した、渡邊義浩（監訳）・谷口建速（訳）『曹操墓の真相』（科学出版社東京、二〇一一年）を参照。
- (2) 渡邊義浩「曹操墓の真相」の行方」（『曹操墓の真相』前掲）を参照。
- (3) 西高穴二号墓についての新知見は、河南省文物考古研究所（編）『曹操高陵考古発現与研究』（文物出版社、二〇一〇年）、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター（編）『曹操高陵の発見とその意義——三國志・魏の世界』（汲古書院、二〇一一年）などにまとめられている。
- (4) 佐々木正治「曹操高陵発掘調査の最新成果と考古学的意義」（『三國志研究』七、二〇一二年）。

- (5) 黄晓芬『中国古代葬制の伝統と変革』（勉誠出版、二〇〇〇年）。黄は、前漢期には、宗廟を墓地の側に移し、廟と墓を融合する陵寝制度が完成されていたとする。これに対して、楊寛（著）尾形勇・太田有子（共訳）『中国皇帝陵の起源と変遷』（学生社、一九八一年、増補版は楊寛『中国古代陵寝制度史研究』上海古籍出版社、一九八五年）は、陵园には寝殿ないしは石殿、および鍾虜が置かれており、上陵の礼と飲酎の礼の需要に因應していた。そうした朝拝の儀と各種祭祀の挙行を主な使命とする陵寝制度は、後漢の時代に完全に確立したとしている。
- (6) （崔）駰案 關中記云、高祖陵在西、呂后陵在东。漢帝・后同塋則爲合葬、不合陵也。諸陵皆如此（『史記』卷四十九 外戚世家 集解）。
- (7) 滿城漢墓については、中国科学院考古研究所滿城發掘隊「滿城漢墓發掘紀要」（『考古』一九七二・一九七二年）。中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处「滿城漢墓發掘報告」（文物出版社、一九八〇年）を参照。
- (8) 大葆台漢墓については、北京市古墓發掘辦公室「大葆台西漢木槨墓發掘簡報」（『文物』一九七七一六、一九七七年）。大葆台漢墓發掘組・中国社会科学院考古研究所「北京大葆台漢墓」（文物出版社、一九八九年）を参照。
- (9) 馬王堆一号漢墓については、湖南省博物館（編）『長沙馬王堆一号漢墓』（文物出版社、一九七三年）を参照。
- (10) 黃腸題湊については、北京市大葆台西漢博物館（編）『西漢「黃腸題湊」葬制的考古發掘与研究』（北京燕山出版社、二〇一三年）を参照。
- (11) 黃腸石については、趙振華「洛陽東漢黃腸石題銘研究」（北京圖書館出版社、二〇〇八年）を参照。
- (12) 後漢になると横穴の磚室墓での同穴合葬が普及することについては、蒲慕州『墓葬与生死——中国古代宗教之省思』（聯經出版事業公司、一九九三年）を参照。
- (13) (1) 光武帝と陰皇后は原陵に、(2) 明帝と馬皇后は顯節陵に、(3) 章帝と竇皇后は敬陵に合葬されている。(4) 和帝は愼陵に葬られ、鄧皇后が順陵に合葬されたところ、李賢の注は「順」が誤り、劉放の刊誤は「愼」が誤りと

する。(6)安帝と閼皇后は恭陵に、(7)順帝と梁皇后は憲陵に、(12)獻帝と曹皇后は禪陵に合葬されている。(10)桓帝と(11)靈帝については、問題が残るため本文で扱う。なお、(5)殤帝(康陵)・(8)冲帝(懷陵)・(9)質帝(靜陵)に皇后は立てられていない。

- (14) 洛陽の後漢皇帝陵については、嚴輝「邙山東漢帝陵地望の探索之路」(『中国文物報』二〇〇六年一月三日)、韓国河「東漢帝陵有関問題的探討」(『考古与文物』二〇〇七年、二〇〇七年)、韓国河「東漢帝陵変制原因探析」、盧青峰「東漢帝陵有関陪葬墓問題的思考」(いずれも洛陽市第二文物工作隊(編)『洛陽漢魏陵墓研究論文集』文物出版社、二〇〇九年)を参照。また、茶谷満「後漢洛陽城の可視領域と皇帝陵との空間関係——洛陽都城圏の様相に関する基礎的考察」(『年報人類学研究』三、二〇一三年)もある。

- (15) 塩沢裕仁「千年帝都 洛陽——その遺跡と人文・自然環境」(雄山閣、二〇一〇年)。その理由は、中国人研究者の間では、後漢の皇后は皇帝との同穴合葬であるという考え方が有力であることに求められよう。

- (16) 太田侑子「中国古代における夫婦合葬——その発生と展開および家族制度との関わり」(『中国の歴史と民俗』第一書房、一九九一年)。このほか、太田侑子「中国古代における夫婦合葬墓」(『史学』四九一四、一九八〇年)も参照。

- (17) 劉尊志『漢代諸侯王墓研究』(社会科学文献出版社、二〇一二年)。このほか、劉振東「東漢諸侯王墓考古發現与研究」(洛陽市第二文物工作隊(編)『洛陽漢魏陵墓研究論文集』前掲、張志清「漢代陵墓考古と曹操高陵」(曹操高陵の発見とその意義』汲古書院、二〇一一年)も参照。

- (18) 合葬、羨道開通、皇帝謁便房。太常導至羨道、去杖、中常侍受。至柩前、謁、伏哭止如儀。辭、太常道出、中常侍授杖、升車輿歸宮。已下、反處立主如禮。諸郊廟祭服皆下便房。五時朝服各一襲在陵寢、其餘及宴服皆封以篋筥、藏宮殿後閣室(『後漢書』志六 禮儀志下)。

- (19) 韓国河「東漢帝陵有関問題的探討」(前掲)は、この資料により後漢の

皇帝と皇后は「同穴合葬」したと解釈するが、武断に過ぎよう。

- (20) 是時洛中貴戚、室第相望、金帛財產、家家殷積。(董)卓縱放兵士、突其廬舍、淫略婦女、剽虜資物、謂之搜牢。人情崩恐、不保朝夕。及何后葬、開文陵、卓悉取藏中珍物。又姦亂公主、妻略宮人、虐刑濫罰、睚眦必死。羣僚内外、莫能自固(『後漢書』列傳六十二 董卓傳)。

- (21) 王莽は、傅皇太后を定陶共王母に貶めて改葬したが、その際、傅皇太后の柩から腐臭が漂い、数里に及んだという(『漢書』卷九十七下 外戚下 定陶丁姬傳)。そうした改葬を行った記録はないのである。

- (22) 續漢書曰、孝靈靈懷王皇后、孝獻帝母、王章女也。……陵曰文昭陵、起墳立陵園北(『太平御覽』卷一百三十七 皇親部三)。

- (23) 楊哲峰「從陵到家——関于東漢・懿陵的思考」(『中国文物報』二〇〇八年二月一日、洛陽市第二文物工作隊(編)『洛陽漢魏陵墓研究論文集』前掲に所収)は、後漢の皇帝陵が「同穴合葬」であることを前提にこの問題を論じているが、懿陵はもともと帝陵として造ったが、追廃が原因で後に宣陵も造ったと述べるに止まり、論理的に説明できてはいない。

- (24) (樊宏)二十七年、卒。遺勅薄葬、一無所用。以爲、棺槨一臧、不宜復見。如有腐敗、傷孝子之心、使與夫人同墳異藏。帝善其令、以書示百官、因曰、今不順壽張侯意、無以彰其德。且吾萬歲之後、欲以爲式。賻錢千萬、布萬匹、諡爲恭侯、贈以印綬、車駕親送葬(『後漢書』列傳二十一 樊宏傳)。

- (25) 上陵の礼については、渡邊義浩「後漢における礼と故事」(『兩漢における易と三禮』汲古書院、二〇〇六年、『後漢における「儒教國家」の成立』汲古書院、二〇〇九年に所収)を参照。

- (26) 曹操の終令には、『三國志』卷一 武帝紀に、「建安二十三(二二八)年」六月、令して曰く、『古の葬むる者は、必ず瘠薄の地に居る。其れ西門豹の祠の西原上を規り壽陵を爲り、高きに因りて基を爲し、封ぜず樹せず。周禮に、家人公墓の地を掌り、凡そ諸侯は左右の以前に居り、卿・大夫は後に居ると。漢制も亦た之を陪陵と謂ふ。其れ公卿・大臣・列將の功有る者は、宜しく壽陵に陪せしむべし。其れ廣く兆域を爲り、相容れるに

足らしむべし」と(六月、令曰、古之葬者、必居瘠薄之地。其規西門約祠西原上爲壽陵、因高爲基、不封不樹。周禮、冢人掌公墓之地、凡諸侯居左右以前、卿・大夫居後。漢制亦謂之陪陵。其公卿・大臣・列將有功者、宜陪壽陵。其廣爲兆域、使足相容」とあるように、「封ぜず樹せず」と規定されている。

(27) 渡邊義浩「後漢儒教の固有性——『白虎通』を中心として」(『兩漢の儒教と政治権力』汲古書院、二〇〇五年、『後漢における「儒教國家」の成立』前掲に所収)を参照。

(28) 合葬者何。所以固夫婦之道也。故詩曰、穀則異室、死則同穴。又禮檀弓曰、合葬、非古也。自周公已來、未之有改也(『白虎通』崩薨)。

(29) (建平二年)六月庚申、帝太后丁氏崩。上曰、朕聞、夫婦一體。詩云、穀則異室、死則同穴。昔季武子成寢、杜氏之殯、在西階下。請合葬而許之。附葬之禮、自周興焉。郁郁乎文哉、吾從周。孝子事亡如事存。帝太后宜起陵恭皇之園。遂葬定陶。發陳留・濟陰近郡國五萬人穿復土(『漢書』卷十一哀帝紀)。

(30) 加賀栄治「中国古典解釈史 魏晉篇」(勁草書房、一九六四年)。間嶋潤一「鄭玄と『周禮』——周の太平國家の構想」(明治書院、二〇一〇年)。

(31) 池田秀三「緯書鄭氏学研究序説」(『哲学研究』五四八、一九八三年)。堀池信夫「鄭玄学の展開」(『三国志研究』七、二〇一二年)。

(32) 「毛傳」穀生、皦白也。生在於室、則外内異、死則神合、同爲一也。「鄭箋」穴、謂塚壙中也。此章、言古之大夫聽訟之政。……(『毛詩注疏』卷六)。

(33) たとえば、鄭玄の『論語』注が「三禮體系」の下に置かれていることは、渡邊義浩「鄭玄『論語注』の特徴」(『東洋の思想と宗教』三一、二〇一四年)を参照。

(34) 孔子曰、衛人之附也離之。「附、謂合葬也。離之、有以間其椁中。」魯人之附也合之。善夫。善魯人也。附葬當合也(『禮記』檀弓下)。なお、鄭玄の注は「」で括弧で表記した。

(35) 渡邊義浩「王肅の祭天思想」(『中国文化——研究と教育』六六、二〇〇八年、『西晉「儒教國家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年に所収)を参照。

年、『西晉「儒教國家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年に所収)を参照。

(36) 渡邊義浩「鄭箋の感生帝説と六天説」(『兩漢における詩と三伝』汲古書院、二〇〇七年)、『兩漢における天の祭祀と六天説』(『兩漢儒教の新研究』汲古書院、二〇〇八年)、いずれも『後漢における「儒教國家」の成立』(前掲)に所収。

(37) 『三國志』卷一 武帝紀に、「(建安二十五(二二〇)年正月)庚子、王洛陽に崩す、年六十六。遺令して曰く、「天下尚ほ未だ安定せざれば、未だ古に遵ふを得ざるなり。葬畢はらば、皆服を除げ。其の將兵の屯戍する者は、皆屯部を離るるを得ず。有司各々乃の職に率へ。斂するには時服を以てし、金玉・珍寶を藏すること無かれ」と。諡して武王と曰ふ。

二月丁卯、高陵に葬る(庚子、王崩于洛陽、年六十六。遺令曰、天下尚未安定、未得遵古也。葬畢、皆除服。其將兵屯戍者、皆不得離屯部。有司各率乃職。斂以時服、無藏金玉・珍寶。諡曰武王。二月丁卯、葬高陵)」とある。

(38) 欲遣使吳、先令北詣鄴謁高陵。(文)帝使豫於陵屋、畫關羽戰克、龐惠憤怒、(于)禁降服之狀(『三國志』卷十七 于禁傳)。

(39) 古無墓祭之禮。漢承秦、皆有園寢。正月上丁、祠南郊。禮畢、次北郊・明堂・高廟・世祖廟、謂之五供。魏武葬高陵。有司依漢立陵上祭殿。至文帝黃初三年、乃詔曰、先帝躬履節儉、遺詔省約。子以述父爲孝、臣以繫事爲忠。古不墓祭、皆設於廟。高陵上殿皆毀壞、車馬還廐、衣服藏府、以從先帝儉德之志。文帝自作終制、又曰、壽陵無立寢殿、造園邑。自後、園邑・寢殿遂絶(『晉書』卷二十 礼志中)。

(40) 一日案行、并視曹公器物。牀・薦席具、寒夏被七枚。介幘如吳幘、平天冠・遠遊冠具在。……器物皆素。今送鄴宮。大尺間、數前已白其總帳、及望墓田處。……(『陸士龍集』卷八 書與平原書 其二)。なお、陸機の曹操への弔文については、渡邊義浩「陸機の君主観と「弔魏武帝文」」(『漢学会誌』四九、二〇一〇年、渡邊義浩「西晉「儒教國家」と貴族制」前掲に所収)を参照。

(41) 殷憲「曹操墓石碑の書法及其他」(『書法叢刊』二〇一二六、二〇二二年)。

(42) (太和四年) 六月戊子、太皇太后崩。……秋七月、武宣太后耐葬於高陵。詔大司馬曹眞・大將軍司馬宣王伐蜀(『三國志』卷三 明帝紀)。

(43) 凡有功者居前「居王墓之前、處昭穆之中央」、以爵等爲丘封之度與其樹數。「別尊卑也。王公曰丘、諸臣曰封。漢律曰、列侯墳高四丈。關内侯以下、至庶人各有差。」(『周禮』春官 家人)。なお、「」で表記した鄭玄注に引用されている漢律の墳丘条が、「大唐改元禮」序禮下雜制や「唐律疏義」雜律舍宅車服器物の疏義などの起源となったことについては、鶴間和幸「漢律における墳丘規定について」(『東洋文化』六〇、一九八〇年)を参照。

(44) 漢承秦制、蕭何定律、除參夷・連坐之罪、增部主・見知之條、益事律興・廐・戶三篇、合爲九篇。叔孫通益律所不及傍章十八篇、張湯越宮律二十七篇、趙禹朝律六篇、合六十篇。……若此之比、錯糅無常。後人生意、各爲章句。叔孫宣・郭令卿・馬融・鄭玄諸儒章句十有餘家、家數十萬言(『晉書』卷三十 刑法志)。

(45) 新律十八篇を制定するまでの曹魏の法刑重視については、渡邊義浩「寛」治から「猛」政へ(『東方学』一〇二、二〇〇一年、『三國政權の構造と「名士」汲古書院、二〇〇四年に所収)を参照。

(46) 凡斷罪所當由用者、合二萬六千二百七十二條、七百七十三萬二千二百餘言。言數益繁、覽者益難。天子於是下詔、但用鄭氏章句、不得雜用餘家(『晉書』卷三十 刑法志)。

(47) 其後、天子(明帝)又下詔改定刑制、命司空陳羣、散騎常侍劉邵、給事黃門侍郎韓遜、議郎庾嶷、中郎黃休・荀詵等、刪約舊科、傍采漢律、定爲魏法。制新律十八篇・州郡令四十五篇・尚書官令・軍中令、合百八十餘篇(『晉書』卷三十 刑法志)。なお、「」は渡邊の補である。

(48) 『資治通鑑』卷七十一は、新律十八篇の成立を明帝の太和三(二二九)年十月、明帝が「平望觀」を「聽訟觀」と改称した記事の後に繋げている。